

愛宕空也

前

ワキ 空也上人

シテ 老翁

後

ワキ 前に同じ

シテ 龍王

地は 山城

季は 雑

「心の月の行末や。く。西の山路に急がん。

「是は念仏の行者空也と申す者にて候。我いまだ愛宕山に参らず候ふ程に。唯今思ひ立ちて候。

「昨日も徒に暮らさず。口に名号を称へ。今宵も空しく明かさず。心に極樂を願ふ。無常の虎の声近づくにも。臨終の夕べの唯今ならん事を歡ぶ。雪山の鳥の囀りを思ふにも。来迎の朝を待つ。一度も南無阿弥陀仏と称ふれば。

「蓮の上に上るなる。く。露の此身を誘ふべき。

峰の嵐や谷川の。水の流れも鳴滝の。川路に就きて尋ね行く。雲も上るや月の輪を過ぎて愛宕に着きにけり。く。

「急ぎ候ふ程に。是は早愛宕の御山に着きて候。まづく地藏権現へ参らばやと思ひ候。実にや都にて承り及びたるよりも貴き靈地にて御座候ふ物かな。南無や地藏大菩薩六道能化にてましませば。

迷ひの衆生を導き給へ。又是なる法華八軸は。帝より賜はりたる御経なれば。先づ仏前にて読誦申さばやと思ひ候。昔在靈山名法華。今在西方名阿弥陀。

地「衆生済度の觀世音。く。頼め唯三つの世も。唯一仏ぞ一乗の。法も妙なる一念。阿弥陀仏と称へ給へや。く。」

シテ「谷静にしては纔に聞く山鳥の語。橋危うしては斜

に踏む峽猿の声。聞くも悲しき老の身の。足弱車法に引かれて。火宅を出づべきうれしさよ。

地クリ「それ始めの御法さまぐなれども。為法便力四十余年。未顕真実と説き給ふ。

シテサシ「然れば余経の瓦礫を捨てゝ。

地「妙法一味の玉を拾はんが為めに。ろくするげきを顕はし。信心不動の禅定に入り給ひ。一切衆生の迷はざる以前。本来の面目妙法金剛不壞の正体に。」

導き入れんと呪秘し給ふ。

クセ「されば此経を説き給ふに。天より四華降り。大地六種も震動し。地神龍神も顕はれ。靈山の会座に連なりしに。眉間白毫を放ち給ひ。天地十方を照らしつゝ。光にあたる物皆悉く成仏す。

シテ「斯かる大乘功德の。

地「妙なる法を聞く時は。靈山会場もこゝなれや。此山松の夕嵐。不求足菩薩住寂靜。清浄心を起せと

の。教へはさまぐの。御法ぞあらたなりける。

シテ詞「いかに上人に申すべき事の候。徒に朽ち果てぬべき老木の桜の。今上人の御法の雨に。湿ひを得て花咲く春に。逢はん事の嬉しさよさりながら。一つの望みを叶へ給へ。

ワキ詞「不思議やな是なる老人忽然と来り。法華を聴聞する気色。唯人ならず見る所に。そも望みとは何事ぞ。

シテ「さん候ふ上人の感得し給ふ。 仏舍利を我にたび給へ。

ワキ「易き間の事なれども。 空也は舍利を感得せず。 まづく御身は如何なる人ぞ。

シテ「今は何をか包むべき。 我は此山に住む龍神なるが。 仏舍利を持すれば三熱をまぬかる。 包み給ふか上人の。 唯今読誦し給ひし。 御経の軸の中に仏舍利あり。 即ち是をたび給へ。

ワキ「不思議の事を申す者かな。 此御経はかたじけなくも。 延喜の帝より賜はりたる八軸なれば。 仏舍利ありとも知らざりしと。 即ち経を開きつつ。 軸を放ちてよく見れば。

地「不思議や軸の其中に。 く。 水晶の箱に入れ。 青色の仏舍利。 赫灼として見え給へば。 即ち取り出だし。 老翁に与へたび給ふ。 見る人奇異の思ひをなして。 上人の御奇特。 まのあたりなるあらたさ

よ。

シテ詞

「実に有難き御事かな。此仏舍利を保つならば。熱
氣熱風金翅鳥の。三つの苦しみをまぬかるべし。
此報恩に何事なりとも。望みを叶へ申すべし。

ワキ詞

「空也が身には望みなしさりながら。此山上に水な
くして。遙かの谷より汲み運ぶ。御身は龍神にて
ましまさば。水は心にまかすらん。此山上に清水
を出だし。絶えぬ流れとなし給へ。

シテ

「是れ又易き御事なり。三日が間に老翁が。まこと
の姿を顕はして。山上に水を出だすべし。

地

「いとま申して帰るとて。く。御前を立つて山深
み。行くかと思れば姿は。夢の如くに失せにけり。

く。(中入)

ワキ

「さても有りつる翁の言葉。まことしからず思へど
も。其約諾を今日の空。気色かはりて雲霧の。
く。立ち添ふ影も鳴神の。声も落ち来る雨の足。

乱るゝ空の気色かな。く。

地

「谷風はげしき雲の波。谷風はげしき雲の波に。浮び出でたる龍神の勢。はるか谷より上ると見えしが。上人に向ひ。渴仰するこそ有難けれ。

後ジテ

「角を傾け上人を礼し。

地

「角を傾け上人を礼し。龍王峰に上ると見えしが。

枯木を倒し岩根を砕き。大石を引き割りえいやと投ぐれば。岩漏る清水玉散りて。さゝ波立つてぞ

流れける。

ワキ

「空也は奇異の思ひをなし。

地

「空也は奇異の思ひをなして。巖に上りて水を結び。天地に供じ。十方の諸仏に手向くる瀉水。

善哉々と。喜び空也は帰り給へば。龍王忽ち雲を起し。愛宕の峰の梢に翔れば。谷には流るゝ白浪の。浮べば沈み上れば下る。龍王の姿も次第に遠く。く。遙かの谷にぞ帰りける。

底本・・国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈第六輯』大和田建樹 著